

宮 操子の動きの理論『動の美』の[基本Ⅲ]及び「三つの基本」の動きの舞踊作品創造への関わりについての考察

堀切絛子

[序] 舞踊家宮 操子(みや・みさこ)の動きの理論『動の美』(どうのび・1997 リーベル出版)の基幹を成すものは、「三つの基本」である。それは、『立っている自然な状態から動きを研究』したもので、『無限に発展してゆく動きの展開への入口であり、あらゆるすべての動きはここに還ってくる』という考えに困っている。

本報告では、[基本Ⅰ](98舞踊学会秋季)、[基本Ⅱ](99同)に続く[基本Ⅲ]について述べ、さらにそれら「三つの基本」の動きがどのように舞踊作品創造に関わるのかについて二項を挙げ、著者がこの動きの理論を通じて何を伝えようとしているかを明らかにする。

[本論] [基本Ⅲ]は、『半身を固定させ、他の半身のみで動く』という動きから創造され、片側の腕と脚の関係から成っており、足(脚)の運びの連続が16歩に納められている。『半身を固定させる』とは、片方の肩にショルダーバッグを掛け、その側の腕をそのベルトに添えて歩く時のように、もう一方の側の腕の振りと脚の歩きが繰り返されるという動作である。16歩の連続の中に、右側と左側の動きが交互に組み合わされ、一見複雑に見えるが、心地好いリズムを作っている。

右半身の腕と脚の関係は、[前]、[後ろ]、[右]、[左斜め前]、[左斜め後ろ]の5方向から成り、[基本Ⅰ・Ⅱ]と同様に[正](せい)・[反](はん)の関係で二種成り立っている。そして、1段階・小さい動き、2段階・中くらいの動き、3段階・大きい動きと段階を経て動きを体験することを大切に考えている。1段階では冠状・矢状縫合面での[正]・[反]の関係を知り、2段階では腰椎の高さでの水平面を境とした[正]・[反]の関係を知り、3段階では片足(脚)での立位の動きの体得となるように、動きの量が変化することで高度な動きを体得することが自然にできるように考慮されている。さらに、この[基本Ⅲ]の動きを基に、片手をからだのある部位に固定させて……、弾みながら……、また、動きの量と質を変えて動いてみたり……など様々な発展を独自に創造することができるのである。

◇ ◇ ◇

宮 操子はこの動きの理論『動の美』の中で、素足で踊る舞踊のための動きの創造と舞踊作品創造に関して、数々の提言を述べている。次に、そ

の中から二項を立て考察する。

第一に、「舞踊のための“動けるからだ”とは何か」である。「自在に動く」とは、柔軟性や敏捷性のみ指すのではなく、また、完成された動きの型を訓練することによるのではないと行間に読み取ることから、次の5点を挙げる。

- ……1. からだの仕組みを知り、体の部位を意識し、明確な方向を自覚して動くことによって、常に動きの『主と従の関係』を作ることにより、“動けるからだ”を造る。
- ……2. 緩やかな動きから速い動きに、小さな動きから大きな動きに移行するなど段階を大切に、より高度な動きを易しい段階から無理なく理解することにより、“動けるからだ”を造る。
- ……3. [正]・[反]という動きを咀嚼、嚥下、消化吸収、排泄した後、尚一層動きを吟味することにより、“動けるからだ”を造る。
- ……4. [外向・内向]、[前進・後進]など対になる動きを等価におくことでからだの自由を知り、“動けるからだ”を造る。
- ……5. 自分自身の短い動きのフレーズを創造した時に、常に三対の明確な方向([前後]・[左右]・[上下])に動きを展開させ重奏させることにより、“動けるからだ”を造る。

これらが、[三つの基本]の中に溶解しており、[基本Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ]を動くことで、知らず知らずの内に“動けるからだ”を造り、動きの発見の方法を身につけることになる。

第二は、「動きの原点とは何かを問いかげながら、では舞踊作品創造の場では、この「三つの基本」をどう考えるか」である。

この点に関して宮 操子は、『あなた自身の新しい作品を作る場合は、この「三つの基本」の動きをバツサリと切り捨て、忘れなければなりません。この基本はあくまでも「動きの基」であり、あなた自身の作品として用いるものではありません。』さらに、『ゆめゆめ借り物をせぬよう……。理、技、感を思う存分働かせ、より良い芸術作品を創り出すべく、そのためにあなた自身を鞭打ち、あなた自身が傷だらけになることを恐れてはなりません。そうすることにより、やがてあなた自身のからだに詩が満つることを祈ります。』と記している。

[結] 舞踊へのこの厳しさを承知しながらも、しかし、舞踊作品創造の過程また完成の段階で、この「三つの基本」は堅固な見えない土台となり、舞踊作品の内奥に脈々と息づいている、と断言する。前述の『からだに詩が満つる』とは、“動き”が“踊り”になることを意味し、舞踊作品の主体はその舞踊作家独自の“動き”にあるとの主張を、この『動の美』に読み取るのである。